

奈良の花街元林院を活性化させるには？

～花街復興に必要なことから考える～

渋谷教育学園渋谷高等学校

土屋 玲奈

アブストラクト

本論文では奈良の花街元林院を活性化させるためには何が必要か、花街復興に必要なことから考えてゆく。先行研究として、奈良の元林院の歴史や復興プロジェクトについて、京都や新潟の古町、神楽坂などの日本全国に現存する花街がどのような方法でその形を維持しているか、また花街特有の制度である一見さんお断り制度の理由を調査した。後、花街の知名度、イメージなどについてアンケート調査を行った。このアンケートの分析により、花街復興のために解消すべき次の 3 つの問題点が浮かびあがってきた。

1. 負のイメージ
2. 高額な料金設定とその不明瞭さ
3. 低年齢層の花街への知名度の低さ

そして以上の 3 つを改善、解消することは花街の復興に役立つと結論づけた。

また、先行研究で調査した日本全国の各花街の状況が、どう元林院の活性化に役立つかについて、実現可能かは不明であるが、他の花街の強みとなる制度や方法を述べることによって結論の補助とした。

目次

1	はじめに.....	1
2	先行研究の分析.....	1
2.1	花街元林院について	2
2.1.1	花街元林院の起こりと発展.....	2
2.1.2	花街元林院復興プロジェクト.....	2
2.2	日本全国に現存する花街	3
2.2.1	京都五花街.....	3
2. 2.1. 1	おおきに財団.....	3
2. 2. 1. 2	芸舞妓のための学校システム.....	3
2. 2.2	古町.....	4
2.2.2.1	柳都振興株式会社.....	4
2.2.2.2	株式会社化の長所と問題点.....	5
2.2.3	東京の花街.....	6
2.2.4	全国の例が元林院の復興に生かせるか.....	6
2.3	一見さんお断り制度.....	7
2.3.1	一見さんお断り制度とは.....	7
2.3.2	元林院での一見さんお断り制度.....	8
3	方法と対象.....	9
4	アンケート結果と分析.....	9
4.1	「花街」という言葉についての質問.....	9
4.1.1	「花街」という言葉の知名度.....	9
4.1.2	実際に知られている「花街」の意味.....	10
4.2	「花街」という場所についての質問.....	11
4.3	「花街」の需要に関する質問.....	11
4.4	日本全国の花街に関する質.....	12
5	結論.....	13
	文献・資料一覧.....	15

図表一覧

図

図 1 2 の質問における回答者の割合(男性)(筆者作成)	10
図 2 2 の質問における回答者の割合(女性)(筆者作成)	10
図 3 2 の質問における回答者の割合(13 歳から 17 歳)(筆者作成)	10
図 4 7 の質問における回答者の割合(筆者作成)	12
図 5 5 の質問における回答者の割合(筆者作成)	13

1 はじめに

本稿では、奈良の花街元林院が再び元の姿を取り戻し、以前のような賑わいをもつ花街に近づけるためにどのようなことが必要か探っていく。

私がこの花街という世界を知り、興味を持ったのは、京都で舞妓になるための修行に励む少女のドキュメンタリーパン組を見たことがきっかけである。彼女らのほとんどは中学校を卒業後、地元から離れて京都の置屋に住み込み、半年から1年ほどの厳しい修行を経て舞妓デビュー¹する。彼女らは修行中、舞を始めとする伝統芸能を身につけ、花街という特殊な世界での生き方を学んでいく。舞妓としてデビューした後は、お座敷を務めながらそれまでと同様に、いやそれまで以上に熱心に芸事に励み、個人差はあるが5. 6年ほど経ったら今度は芸妓としてデビュー²する。

私は花街という特殊な世界の中で生きる芸舞妓の身につける雅な着物や、髪に挿す四季折々のかんざし、彼女らの持つ芸、また花街の中での考え方、人々のつながりが後世に残っていく価値があるのではないかと考えた。そんな折、奈良の花街元林院が花街として存続の危機に陥っており、関係者が復興のプロジェクトを立ち上げ、活動していることを知った。そして、当時も元林院にいる芸舞妓が数えるほどしかいなくなっているということで、後継者不足を解消することが必要と思い、これを仮説とした上で花街元林院の復興に少しでも貢献できないかと考えていた。だが研究を進めていく中で、この目的の達成のためには後継者不足の他にも、多くの要素が関係していることがわかつてきた。よって、この元林院の復興のため、解決が必要となる問題点を広く探していく形で研究を行った。なお、奈良の花街の芸舞妓育成の仕方と前述した京都の花街での芸舞妓の育成の仕方には大きな違いは無い。

この論文のテーマについては、賛否両論様々な意見を頂戴した。花街はかつて遊郭として栄え、現在のような芸を売る芸者の中にも、体を売る娼妓が実在した。だが現在は、第2次世界大戦後の売春禁止法(1956年)によって色を売る街はなくなったことになっており、娼妓は日本全国どの花街にも存在しない。(澤村 2012)京都のような大規模で、芸舞妓の数が多い花街でも、現在では日本の伝統芸能を守り、おもてなしの文化を花街に関わる人皆で支えて成り立っている。それが現在の花街である。したがって筆者はこの論文の目的を、日本の伝統芸能とおもてなしの文化を街全体として守り、受け継いでいく街としての花街を活性化させること、としている。そして奈良の花街元林院復興プロジェクト³の目的である、おもてなしの心を再興しその文化を継承、発展させることを一番に考え、研究を進めた、ということに理解を頂きたい。

また、この論文では日本各地の花街にいる芸者をその地での呼び方で表記するが、芸妓とだけ書いた場合は「げいこ」と呼んで頂きたい。特別な読み方の場合はその都度読み方を表記する。加えて舞妓については「舞妓」「舞子」、芸妓(げいこと読む場合)については「芸妓」「芸子」のそれぞれ2種類の表記があるが、同じものを指すことをここで示しておく。

2 先行研究の分析

¹ 少女が舞妓としてデビューすることを見世出し(店出しどもいう)と呼ぶ

² 舞妓から芸妓になることを襟替えと呼ぶ

³ 2. 1.2 で述べる

ここでは先行研究として花街元林院の歴史と現在、日本各地の花街の例、花街の代表的制度である「一見さんお断り制度」の3つをそれぞれ取り上げる。

2.1 花街元林院について

2.1.1 花街元林院の起こりと発展

勝部によるとまず、元林院という地名であるが、この元林院町は阿修羅像などで知られる興福寺の別院元林院の旧跡であったことからついた名前である。江戸時代にはここに、仏画などを描く絵師が住んでいたことから絵屋(えや)町とも呼ばれていた。元林院町が花街となったのは明治初期のことであるが、この二世紀以上も前に、近松門左衛門や伊原西鶴の作品でその名が知られる、木辻遊郭が同じ奈良町に存在していた。具体的には、明治三年と五年に、揚弓屋と遊郭がそれぞれ開業許可を受け、花街元林院として形作られていった。(このことは藤田祥光氏の手写記録「奈良雑稿」の中の探訪記録から知ることができる)

出来上がった当初は、芸妓娼妓が混在する花街であった元林院であるが、明治中期頃から芸妓中心の花街として発達していくことになった。この過程は、水木要太郎氏の史料「大和の遊郭 木辻と元林院」から知ることができる。これによると、芸娼妓開放などの布令後、奈良の花街は木辻、元林院の二箇所に限定させること、元林院では娼妓が禁止とし、芸妓のみとすること、酌取女の人数を増やさないこと、儲けた金から一人につき年間一両一歩を月割して木辻に渡すこと、さらに娼妓本位の木辻遊郭と同種の営業にならぬようにすることなど、かなり木辻優位の取り決めがなされている。これは、古来よりある木辻遊郭と、新しい元林院の力関係の差によるものであったと考えられる。また、娼妓本位の遊郭として昔からその存在意義と大きな経済効果をもたらしてきた木辻遊郭を無視できないことから、元林院はこの命令後、芸妓本位の花街となったのである。(勝部 2013) そして、池田によると花街となった後の元林院では、大正年間から昭和戦前期の最盛期には置屋12軒、芸者は200余人を数えたとも言われている。(池田 2008:97)

2.1.2 花街元林院復興プロジェクト

前述の通り、芸妓本位の花街として栄えた元林院は、奈良新聞によると、大正時代から昭和初期にかけて200人を超える芸舞妓を抱え京都の祇園や大阪の花街にも負けない賑わいを見せていましたという。しかし、時代の移り変わりで今は置屋が一軒、芸妓4人となり、このままでは存続さえも厳しい状況となつた。(『奈良新聞』 2014.4. 4) (2016 年現在は不明)

そのような厳しい状況に歯止めをかけようと 2014 年に始まったのが「花街元林院復興プロジェクト」である。このプロジェクトでは目的を以下のように設定している。

かつて栄えた伝統ある奈良町元林院花街の魅力とおもてなしの心を再興し、

そして、芸子・舞子を育成するとともに、地域芸能を伝承しながら、

文化の継承・発展を目指すことを目的とする。

(奈良 元林院花街復興プロジェクトホームページ:最終閲覧日 2016 年 7 月 20 日)

このプロジェクトの中心人物であるのが、元林院のお茶屋「つるや」の芸妓の菊乃さんである。菊乃さんは中学校卒業

後、お茶屋を営む叔母から誘いを受け、花柳界に入った。平成2年に舞妓として見世だしをしその6年後芸妓となった。(『産経新聞 WEST』 2015. 5. 23) このプロジェクトで実際に行った活動はというと、舞妓の復活を目指した小学生による「ちびっ子舞妓」体験や舞妓志望者を募るミスコンの実施など、今までにない活動を実施している。また、全国から18歳から20歳の舞妓志望者を募り、「お仕込みさん」として給与を支払う制度のも導入しており、現在では選ばれた「お仕込みさん」が修行中である。(『産経新聞 West』 2014. 1. 6)

2.2 日本全国に現存する花街

日本全国には未だたくさんの花街が現存している。それぞれ規模の違いがあり、独自の方法でその姿を残している。ここでは、各地の花街の中で特に特殊な方法で存続しているものを取り上げ、先行研究とした。

2.2.1 京都

花街としての京都の知名度はとても高い。後述する花街の知名度を調べるアンケートの、花街のイメージを問う質問で、京都と回答する人は年齢を問わず多かった。その規模は大きく、芸舞妓の数も同様に多い。

2.2.1.1 おおきに財団

京都には、祇園甲部、祇園東、宮川町、先斗町、上七軒の五つの花街が現存しており、五花街と呼ばれている。それらの花街の存続を支えているのがおおきに財団である。おおきに財団は1200有余年の歴史の中で育まれてきた京都の伝統文化や花街に息づく伝統伎芸の保存・継承に努めることを目的に(おおきに財団ホームページ:最終閲覧日 2016年7月26日)、1996年に設立された。この目的のため、財団はたくさんの事業を行い花街存続に努めている。経験豊かな芸妓への奨励金の支給、新米芸妓への衣装新調の補助という芸舞妓への直接的な支援や、祇園の祇園祭花傘巡行、上七軒の梅花祭など伝統行事参加に際して、各歌舞会に助成を行ったり、外国人観光客を見据えた外国語対応の広報を行ったり…。他にも、全国の学生へ修学旅行の誘致を行い、京都や花街への関心を高める活動をしたり、後継者の募集、また京都以外の出身の芸舞妓の増加に伴い、京都の歴史や文化、観光に関する研修会を行い、彼女らの資質の向上に努めている。さらに、五花街の芸舞妓が芸の研鑽を発表する場を設けるため、五花街合同公演も開催している。(公益財団法人京都伝統伎振興財団 平成28年度事業計画について)

2.2.1.2 芸舞妓のための学校システム

京都五花街には、芸舞妓の技能を磨くための教育施設が、それぞれの花街について一つずつある。祇園甲部の八坂女紅場学園、宮川町の東山女子学園、先斗町の鴨川学園、また西尾によると、上七軒、祇園東ではそれぞれ歌舞練場の見番、設けたお稽古場において師匠を呼んで稽古をしている。京都五花街の芸舞妓は日本舞踊や長唄、三味線に加えて太鼓や笛、茶道など様々な芸事を学ぶ。彼女らは現役でいる限り、このいわば学校に通うことになっており、学校といえども、卒業はない。また、踊りの会⁴を主催し、彼女らの日頃の研鑽を発

表する場を設けている。

西尾はこのような花街の学校におけるメリットを以下の4つ挙げている。

1. 「型」と統一による美しさ
2. 即興性の高い技能の発露
3. モチベーションのアップ
4. 費用と機会のメリット

1については、一つの花街では芸舞妓さんが全員、様々な芸事と同じ流派の師匠から習うため、同じ型をみんなが共有することができる。これにより、「型」がそろった美しい芸を披露することができ、一つの集団としての芸の質の向上につながるのである。

2では、その街の芸舞妓は全員が同じ場所で学んでいるため、互いのレベルや性格を知っている。そのためお座敷という仕事の現場でも互いに協力して一つの空間を作ることが容易になる。

3については、学校では先輩後輩も皆集まるので、互いの技能レベルがよくわかり、目標とする人を見つけやすい。またこのような教育施設は、同じころにデビューした同期の芸舞妓と会える場所でもあるので、互いに切磋琢磨することが自然と促されるのである。これは筆者の推測であるが、踊りの会⁵へ向けた稽古もこの教育施設で行われることから、大きな舞台に立つことができるこの踊りの会を目標に頑張るというような、目標を見つけやすく、こちらも芸舞妓のモチベーション向上に貢献していると考えられる。

4の理由として、これらの教育施設、いわば学校では大人数が一度に学ぶことができるので、専門家からの指導を個人稽古より安く済ませることができる。そのため、それぞれの置屋の規模や経営状況に左右されずに、学び続けることができるのである。(西尾 2007:178-190)

2.2.2 古町

新潟県新潟市の花街、古町ではなかなか例を見ない方法で花街の姿を維持している。それは、「芸者置屋の株式会社化」である。

2.2.2.1 柳都振興株式会社

澤村によると、柳都振興株式会社は1987年に商工会議所が中心となって、料亭などの花街関係者や新潟の財界人、企業が出資し設立された。

そもそも、古町には江戸時代にいくつもの花街が転々としていたのだが、明治20年代に続いた大火を契機に明治政府が遊郭を整理整頓し、ひとつの花街にまとまったのである。しかし、当時に新潟航空の社長であり、この柳都振興株式会社立ち上げに尽力した中野進社長は

江戸時代から、豪商・豪農の旦那衆が個人財力で花街システムを支援してきたシステムが戦後、崩壊し、個人の置屋で若い人を育てきれなくなった。そこで置屋を企業化し、大勢がスポンサーになって支えることを考えた。

⁵ このような教育施設は毎年芸舞妓へ日頃の芸の研鑽を発表する場を与えており、各花街によって異なる。祇園甲部の「都おどり」や、宮川町の「京おどり」など

と述べた。(『週刊朝日』 2013.11. 21)さらに、

新潟は港町で、人とモノと情報が行き交う場所。いろいろな人の間を取り持つのが料亭文化なんですよ。料亭という場、料理、酒、もちろん一番大事なのがお客様との間を取り持つ芸妓です。(中略)…私は茶の湯と並んで料亭文化は日本の文化の粹だと思っています。

柳都振興を立ち上げた 21 年前は、一番若い芸妓が 36-37 歳になっていたんです。彼女たちは 10 代で芸妓になるから、すでに 20 年くらいは芸妓のなり手が出てこなかったということです。これを放置しては何年か後には芸妓が絶えて、料亭もだめになる。これは交流によって街が成り立ってきた新潟にとっては、芸妓、料亭に限らず産業界全体の問題でもあります。それで考えたのが置屋の株式会社化。(中略) 資本金の 7,000 万円は産業界からの出資ですぐに集まりましたね。

後に他の県でもその方式を参考にして地域の料亭文化を守ろうとしたのですが、失敗に終わったところもあるようです。よそが失敗して新潟がうまくいったのは、三位一体の協力の賜物だと思います。料亭に世話になってきた財界と、料亭の主たちと、それまで自分の才覚と腕だけでがんばってきた現役の芸妓、姉さんたち。この三者が料亭文化を未来につないでいこうと協力できたところが、うまくいった最大の要因です。特に姉さんたちは、大きな心で柳都振興の新入社員(若い芸妓)を育ててくれました。

(新潟文化物語～特集vol. 19「新潟稽古と料亭文化」～芸妓を絶やすな 最終閲覧日:2016 年 7 月 26 日)

このように料亭文化を守ろうとする人々の多くの協力(財界、料亭、芸妓)により古町の花街としての姿を残すことが可能となっているのである。

2.2.2.2 株式会社化の長所と問題点

柳都振興株式会社の設立により、古町の花柳界は勢いを取り戻し始めた。置屋の株式会社化により、澤村の見解では芸舞妓の雇用面では全く O L と変わらなくなっここと、若い世代の抱くイメージにうまくマッチしているようだ。

実際、花柳界ライターの浅原須美氏が古町の芸妓で留袖⁶のあおいさんを取材した際、こう話した。

職業欄に「会社員」とかけるからクレジットカードの審査も通りやすいんですよ
(『週刊朝日』 2013. 11. 21)

このように時代の流れにうまく沿った形であるからこそ、古町の活性化が進んでいるのである。

しかし、この置屋の株式会社化によって新たな問題点が浮上している。特に新人の芸妓には会社員として雇っている以上、給料を支払わないわけにはいかず、人前で披露するレベルの芸を身につける前に座敷に出さな

⁶ 柳都振興株式会社に所属する芸者さんの中には、若手芸妓(げいぎと読む)である「振袖」と、一定の経験を持つ芸妓であるを「留袖」がいる

くてはいけないため、芸能の継承に不安が残っているのだ。それは舞などの伴奏を努めている地方の育成も同様で、現状は厳しいようである。（澤村 2012）

2.2.3 東京の花街

西尾によると、花街が最盛期を迎えたといわれる 1929 年には、東京の花街には約 7500 人の芸者さんがいた。当時東京には、新橋や浅草を始めとして 33 の花街が存在していたが、昭和 40 年以降急速に衰退している。1999 年、柳橋の有名料亭「いな垣」が廃業した後、東京の花街は新橋、向島、赤坂、芳町、神楽坂、浅草の 6 つとなっている。しかしいずれの花街の規模は、最盛期の数パーセントにまで減少している。（西尾 2007:33）

澤村によると、このような背景の中、東京六花街の一つ神楽坂では 1991 年に神楽坂の将来像を話し合う場を設け、住民が中心となってイベントを行ったり、タウン誌を発行したりと精力的に活動していたが、1999 年に神楽坂地区内に大規模マンションを建設するという計画が明らかになり花街の存続が危ぶまれたことによって、神楽坂地区の歴史的環境の保全を行うことを目的として NPO が「粹なまちづくり俱楽部」を発足した。発足時はシンポジウム等が主な活動であり芸者さんらの所属する花柳界と一体となって活動をすることは少なかったが、まちづくり事業の実績を積むことで段々と花柳界の協力を得られるようになった。この時期に NPO から事業会社をスピンアウトし、事業としての文化企画を行い、新たな客層を開拓する活動を行うようになった。その一つに、低料金のお座敷体験がある。お客様の側から、芸者への関心は高いけれど、また敷居も高いという声がよく出ることから、見番の稽古場を使うことでこの計画を実現させた。芸者の側もこの活動に意欲的で、なおこの機会に内部を公開することで色街との混同がなくなり、花街に対する誤解や偏見も少なくなったようだ。（澤村 2012）

2.2.4 全国の例が元林院の復興に生かせるか

1 で述べた京都の花街は規模が大きく、芸舞妓の数も多い。そしてこの状態を維持するのに、先述したそれぞれの花街の学校システムが一役買っていると考えられる。地方出身の、芸事の経験のない少女が、踊りの会やそれぞれの目標となるような発表の場が設けられているから、互いにモチベーションを高く持って互いの芸を磨きあう。実際に彼女らの仕事場でも、「型」にそろった美しい芸を披露し、お座敷でも互いに協調しあえる。これらはまさにすべて、この学校システムの賜物であるといえるだろう。さらに、個人で習うよりも安価で済むというのはとても大きい。したがって、この芸舞妓のための学校システムは京都五花街が持つ大きな強みといえるに違いない。

しかし、このような学校システム、すなわち芸舞妓の教育施設を元林院に作ることができるかというと、それには到底頷けないだろう。現状のように小規模の元林院では、教育者の確保やそもそも教育を受ける芸舞妓の存在が無ければ話にならない。だが実際に芸舞妓をそこで教育するかどうかは別として、「おおきに財団」のような花街丸ごとをバックアップする仕組みは、花街を継承してゆくためには必要不可欠であるように思える。元林院では、現在行なわれている復興プロジェクトが主体となって、芸舞妓をバックアップしてゆくのが一番手っ取り早いのではないか。

2で述べた古町の「置屋の株式会社化」というやり方は、元林院の再生にどう役立つのであろうか。株式会社化に当たっては、出資金を考えると、資金面での多方面からの援助が不可欠となる。しかし、万が一元林院花街復興プロジェクトの中心の芸妓さんである菊乃さんが自身のもつ置屋を株式会社化する場合、どの程度の援助が得られるのかは不明である。ただ、個人の置屋で芸者を育てられなくなつたことから、大きな枠組みで後継者を育てるというやり方は1と共に効果的であると言える。

3の神楽坂の例から学べることは、低料金のお座敷体験である。後述するアンケートでも、お座敷の値段の高さに不安を覚える人が多々いることがわかるので、新規のお客を開拓するためにも有効であると考えられる。興味はあるけれど、普通の人は近寄りがたく、高級なイメージがあるため足を運びづらいという人にも、低価格の体験といえばより気軽に感じられるのではないか。お座敷というのではなく、あえて体験といい、初心者の関心を引き付ける効果があると思う。また、内部を公開することは、花街にあまり良くないイメージを持つことに対する解決方法としては、非常に効果的なのではないか。実際に自らの目で内部を見、かつ芸者さんたちと実際に触れ合うことにより少しづつであるが、負のイメージの改善や昔は遊郭の歴史があつたけれども、現在では全くなく、日本の伝統を守る街となつてることへの理解が育まれるのではないかと考えられる。

したがつてこの先行研究を通して、他の多くの花街が居移して持つている大きな枠組みで花街全体、そして芸舞妓を支えていく仕組みが元林院には不足していることが分かった。また神楽坂が遊郭としてのイメージ払拭のための内部公開を行う活動を行つていて、元林院の衰退にも、花街の持つ負のイメージが関係している可能性を見出すことができた。このため、後述するアンケートでも、このイメージについて調査を行つた。

2.3 一見さんお断り制度

2.3.1 一見さんお断り制度とは

一般的な花街に共通して存在する、一見さんお断り制度というものがある。この制度は普通の料亭では見られない花街特有の決まりである。ここではこの一見さんお断り制度について述べる。

一見さんお断り制度は、簡単に言うと初めてのお客、紹介の無いお客様はお座敷に上がることができない、というルールである。したがつて新規のお客をどんどん取り込むことは少ない。これは一見、商売をする側にしたら建設的なやり方ではないと思われるかもしれない。だが、西尾は、この制度が生まれたいきさつとして次の3つを挙げている。

1. 長期掛け合いの取引慣行→債務不履行の防止
2. もてなしというサービス→顧客の情報に基づくサービスの提供
3. 職住一体の女所帯→生活者と顧客の安全性への配慮

1はお座敷遊びの支払いの方法に基づいている。馴染みの客はお座敷遊びをしても、その場では支払いは行わない。お座敷遊びにかかる一切の経費をお茶屋建て替え、お客様への請求は後日ということになるのだ。この方法では、お茶屋とお客様の間の信頼関係というのが必須となる。したがつて初めてのお客では、このような信頼関係が築けていないから遠慮していただくというシステムである。この両者の信頼関係を重視することによって、債務が不履行になることを防いでいるのである。

2の理由には、お座敷内でのもてなしというのはお客様によって異なり、馴染みの客の好みに合ったサービスをそれぞれ提供するのである。料理の内容から、お座敷遊びの有無、芸舞妓の人数まで…。よって初めてのお客ではその好みがわからないため、お客様のニーズにあったサービスが提供することが難しいとの理由で新規のお客は遠慮してもらっている、というのも一つの理由だ。

3について、お客様が上がるお座敷はお茶屋の中にある。したがってそこはお茶屋のお母さんや芸舞妓さんの仕事場でもあり、生活の場でもある。また置屋を兼ねたお茶屋では、そこは芸舞妓さんの生活空間でもあり、女所帯なのである。よって昔は男性客がお座敷に上がることが主だった⁷花街では、馴染みのない客をお座敷に入れることは知らない男性をお茶屋に入れることになり安全上不安だから遠慮していただくということが行われている。(西尾 2007 : 68 - 74)

この3つの中で特に大きなものは1であると筆者は考える。持田によれば、京都のお座敷では芸舞妓さんを呼ぶのに3時間ほどで4万円から5万円ほどかかるというし(持田 2010 : 200)、お座敷を後にして二次会に行くとなればそこの支払い、移動の費用までお茶屋が立て替えることもある(西尾 2007 : 71)から、その金額は決して安くはない。よってこの代金をお客さんがしっかりと支払わないと、お茶屋がすべて負担することになり、大きな痛手となる。このため、一見さんお断り制度は合理性に基づいた決まりであると言え、現在も確実に機能しているのである。

2.3.2 元林院の一見さんお断り制度

かつて京都と並ぶほど大規模の花街であった元林院でも一見さんお断り制度は根付いていたようであるが、これから元林院は花街としてどうこの制度と向き合ってゆくべきだろうか。花街というものは、新規のお客を積極的に取り入れるというようなやり方では成り立っていないと言って、元林院に継続的に足を運ぶお客様はごくわずかになっている現状を放っておくのは得策だろうか。筆者はそうは思わない。一見さんお断り制度を重視するあまり、新規のお客を取り入れないということはあってはならないと考えている。一見さんお断り制度こそが、花街の人々の、最高のおもてなしをしたいという思いと合理性が合わさったシステムであることは確かである。けれど、時代の流れとともに人々の考え方やニーズも変化するため、多少の妥協は止むを得ないと思う。つまり、私が言いたいのは、積極的に新規のお客を取り入れていくべきだということだ。その中で、前述した神楽坂のお座敷体験のような取り組みは非常に有効であるに違いない。

逆に先述の様に、新規のお客を歓迎することによって逆に私が危惧していることがある。それはお客様の確保ばかりに気を取られて、お座敷をはじめとする花街の経済活動が単なる商業活動となってしまうことだ。本来の、元林院の復興を通して、おもてなしの心を再興しその文化を継承、発展させるという目的のためには、単に花街に人々を呼び込んで、花街 자체をエンターテイメントパークのようにさせないというのも大切であり、人を取り入れることとのバランスが難しい課題であると思う。

⁷ 現在ではそのような決まりはない

3 方法と対象

前項で筆者は、積極的に新規のお客を受け入れてゆくべきだと述べた。まずその第一歩として、まず花街としての元林院を広く知つてもらうことが大切である、と筆者は考える。そこでここでは、花街の知名度についての質問を設けた。また神楽坂の例から、花街のイメージ、花街が正しく理解されているかについて調査を行う質問を作った。他にも筆者は、どの程度一般の人々が花街を訪れたりする経験があるのかということや、彼らの花街への興味関心を問うことで、新規のお客を取り入れるヒントとなる可能性があると考え、そのような質問も設けてアンケートを作成した。

前述したように、一見さんの花街に対するイメージや花街への理解度、知名度などを調査するという目的でアンケート調査を実施した。対象は40代50代の男女177名と、13歳から17歳までの男女138名である。以下にこのアンケート調査で実際に回答してもらった質問を、問題順に提示する。ただし、13歳から17歳までの若い年齢層には、実際に花街に足を運んだりする経験は少なく、年齢的にもお座敷に上ることは難しいと判断し、5の質問までを回答してもらつた。

1. 年齢と性別

2. 「花街」という言葉を知つているか。

(選択問題: 1.よく知つている、2.なんとなく知つている、3.聞いたことはある、4.聞いたこともないし知らない)

3. 2の質問において1から3と答えた人に向けて、その言葉の意味

4. 「花街」という場所へのイメージ

5. 京都以外に知つている花街があるかどうか。

また、その「花街」の名前。

6. 実際に「花街」を訪れたことがあるかどうか。

7. 「花街」で体験できるお座敷遊び(食事や、お茶屋遊びや舞などの伝統芸能)を述べた後、実際に「花街」へ行ってみたいかどうか。またその理由。

4 アンケート結果と分析

2.3.1 で行ったアンケート調査の結果を提示し、一見さんの花街に対するイメージや花街への理解度、知名度を比べた。またそれぞれの結果について、分析を行つた。

4.1 「花街」という言葉についての質問

4.1.1 「花街」という言葉の知名度

2の質問:「花街」という言葉を知つていますか。

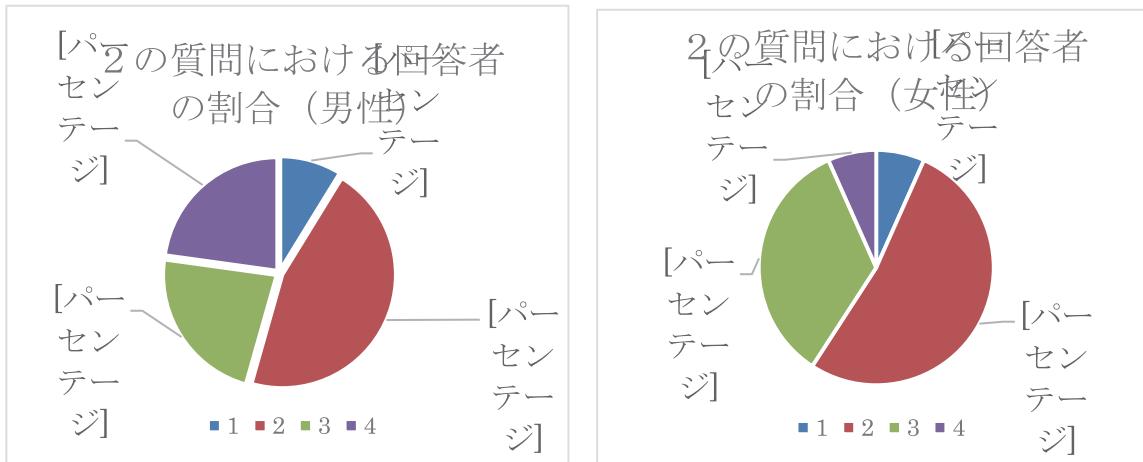
選択肢: 1.よく知つている

2.なんとなく知つている

3.聞いたことはある

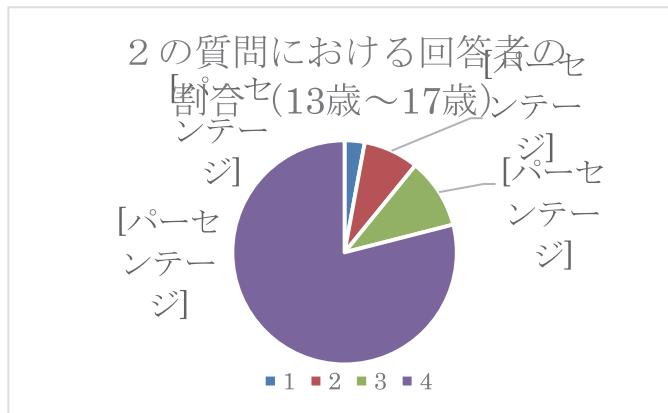
4. 聞いたこともないし知らない

この質問の結果は以下の図のようになつた。



結果、1. よく知っている、2. なんとなく知っている、と回答した男性、女性はそれぞれ 54 パーセント、パーセントとやや女性の方が「花街」という言葉についての認知度は高いことがわかる。

また 10 代の若い年齢層についてはこのような結果となつた。



グラフの示すように、4. 聞いたこともないし知らないと回答した人が大部分を占めた。実際に少女が芸者を目指して花街にやってくる時、多くの場合 10 代という若い年齢であることから、この結果は後継者不足につながると考える。その多くは中学卒業後から高校卒業後までの、15 歳から 18 歳までの少女達だ。今回の調査では 13 歳から 17 歳までの男女を対象としたことから、花街に足を踏み入れる年齢に近い年齢の若者の、花街への認知度が非常に低いことがわかる。したがってこれは花街での後継者不足に直結すると考えられる。よって、筆者の仮説である後継者不足は確実に起こりうることがこの結果から読み取れる。ただし京都では例外である。西尾によると京都では、芸舞妓の数は横ばいとなっており、むしろ逆に修行に入りたい少女が多く、置屋の数が足りないということだ。(西尾 2007:)

4.1.2 実際に知られている「花街」の意味

3の質問:あなたの知っている「花街」とはどのような意味ですか。(形式:自由記述)

この質問の結果、回答は様々であったがあまり男女によって回答の差は見られなかった。中には「お客様がお酒を交えながら、歌や踊りなどの技量を持った女性の接待を受ける場所」のように詳しく回答しており、どのような場所であるのか正確に理解している人も少なくなかった。しかし、前者のように回答した人の中にも、「男性限定のみがもてなしを受け

る場所」や「男性が楽しむ場所」のように回答した人も多く、客層の変化や、花街は男性のみが入ってよいというような決まりがあるわけではなく、お客様のニーズに合わせて臨機応変に対応できる場所であるということへの理解度があまり高くないということが、この実験結果より得られた。また、この質問には「娼妓のいる街」や「昔は遊女遊びの街」のように回答した人も多く、次項でも後述するが、今現在でも売春が行われていると誤解している人や、今日には娼妓がないということを理解はしていても、過去の状態に引っ張られてしまっている人も多々いた。

4.2 「花街」という場所のイメージを問う質問

4の質問:「花街」という場所についてどのようなイメージを持っていますか。（形式:自由記述）

この質問の結果、「華やか」や「美しい」のように、実際の芸者や彼女の持つ伝統芸能、身につけている衣装などからこのように回答した人が多いのではないかと推測できる。また「舞妓 Haaaaan!!!」（2000年公開）や「舞妓はレディ」（2014年公開）のような舞妓が題材となった映画をイメージする人もおり、このような映画から「舞妓さんの美しさ、華やかさ」というように回答した人もいるのではないかと考えられる。さらに、「日本の伝統の一部」や「外国人に人気」のように、花街は日本特有の世界であることから、外国人に向けて観光スポットの一つであると回答し、日本の伝統を発信するのに効果的であると回答した人も多かった。

しかし、前述の通りやはり拭いきれないのは花街の過去の遊郭としての負のイメージである。家庭の経済的な事情から、娘を花街に送り担保として働かせるという歴史があったことは確かである。このことから「男尊女卑」の世界が今でも残っていると考えていたり、現在は昔とは異なり「ただ芸を売る場所」であるということをわかってはいても、負のイメージを持った歴史のある場所に行く人に対する偏見のような回答も多数あった。これらには男女差は特に見られなかつた。この結果は十分に花街のイメージの悪さを示しているといえ、花街衰退の一因となっていると言えるだろう。

さらにもう次に回答として多かったのは、花街を楽しむには高額なお金が必要であるというイメージである。3の質問の回答にも「花街は富裕な男性が楽しむ場所」というように、一般人では行けないと考えている人も多い。確かに京都のお座敷では一般的に4万円から5万円ほど必要であるといわれている。（持田 2010:200）この金額は確かに一般人には高額であり、そう簡単に足を運べないというのも頷ける。この問題に拍車をかけているのは、高額であるというイメージに加えて、料金がどれくらいかかるのか、一般人が知りづらい、言葉を変えて言えば、「料金の不明瞭さ」である。花街ではお茶屋のお母さんが宴席をすべてコーディネートし、どのような宴になるのか、またそれによってどの程度お金がかかるのかがお客様のニーズによって異なる。しかも、初めてのお客はどのようにお座敷でふるまうべきか知らないため、余計に不安になってしまうのである。このような「料金の公開がなされていない」ということも、新規のお客が花街に入りづらくなってしまう原因となっている、と考えられる。

4.3 花街の需要に関する質問

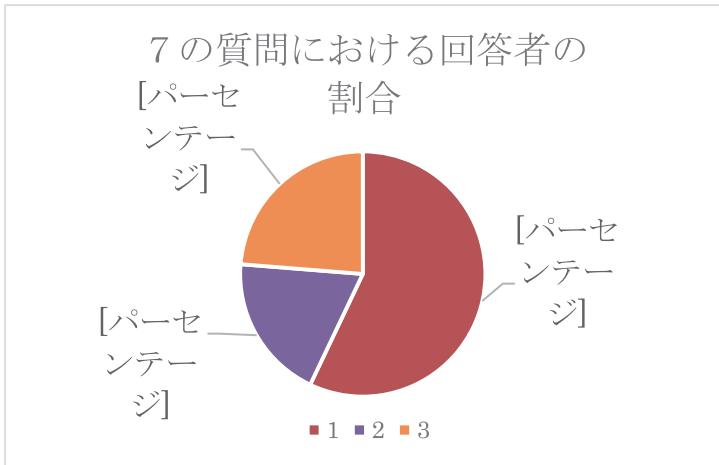
7の質問:一般的な「花街」のお茶屋では、食事に加えお茶屋遊び、さらに芸者さんの舞などの芸を楽しむことが出来ます。もし機会があれば「花街」に行ってみたいですか。当てはまる番号と理由をお書きください。（形式:選択肢と自由記述）

選択肢:1.行ってみたい

2. 行ってみたい

3. わからない

この質問の結果は、以下のようなグラフとなった。



この質問においても男女差はほぼ見られなかった。結果、行ってみたいと答えた人が「過半数を超えたことにより、筆者の予想よりも大勢の人が花街に対して興味を持っていることが分かった。理由については「日本の伝統をより深く知りたい」という答えや「大人として一度は経験してみたい」というように非日常の空間で高級感のある場所での遊びに憧れを抱いている人は多いようだった。伝統文化に興味があるという回答の中に、興味深い回答があった。それは「お座敷での芸を歌舞伎や落語のような日本のエンターテイメントとして楽しみたい」というものだ。この回答から考えられるのは、ほかの日本の芸能と同じように、お座敷での芸を気軽に楽しむことができれば良いという期待である。前述のように、花街で必要な料金の高額さが改善され、それによって花街の敷居の高さが改善されればこの期待に近づきより多くの人が気軽に芸を楽しめるようになるのではないかと考えられる。また一般的な人がより簡単にお座敷に上がるために、旅行会社によるツアーでお座敷体験をしてみたいという声もあった。実際に様々な団体がお座敷体験を行っており、比較的安価な料金で気軽に芸者さんやその伝統芸能に触れられる機会を提供している。実際に元林院でも、菊乃さんの経営するお茶屋「つるや」でのお座敷体験を行っており、実際にお客も集まつたようだ。このように実際にお座敷を体験することによって、今まで全く花街に縁がなかった人も、花街を理解する機会となるのではないかと考えられる。

4.4 日本全国の花街に関する質問

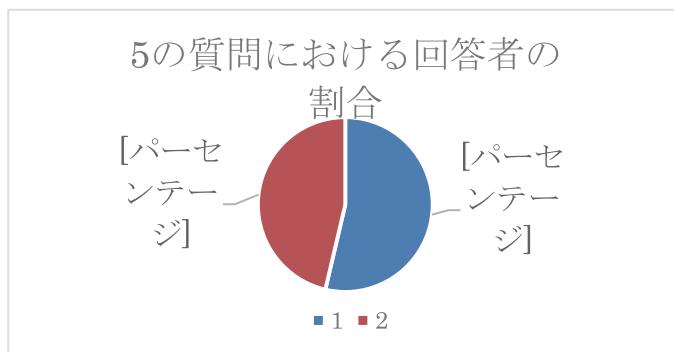
5 の質問: 京都の祇園以外に「花街」の場所を知っていますか。

知っていると答えた場合はその名前を書いてください。

選択肢: 1. 知っている

2. 知らない

この質問では、日本全国にある花街の知名度について調べるとともに、奈良の花街元林院を知っている人がいるのかということについても調査すること目的としていた。



この結果を以上に記す。日本全国の花街についてはほぼ半分ずつということで、やや知っている人の方が多かった。2の質問で1.よく知っている～2.なんとなく知っている、までを含めると、男女合わせて約58パーセントが花街についてある程度の理解があると考え比べると、この質問で祇園以外の花街を回答できた人々の割合とさほど差がないことから、花街についてある程度の基礎知識がある人はどのような場所が花街であるかわかり、具体的な場所も知っているのだと、推測できる。だが、奈良の花街元林院と回答した人は一人もなく、この知名度が低いと考えられる。ただし、この質問の形式が自由記述であったことから、「奈良の元林院を知っていますか」と質問すればまた違った結果が得られた可能性もあり、正確には元林院の知名度を調べることができなかつたことは残念であり、反省点となった。

5 結論

本研究では奈良の花街元林院を、もとの賑わいを持った花街に少しでも近づけようと、先行研究に加えアンケート調査を行った。先行研究では、まず元林院の歴史や成り立ちと復興プロジェクトの概要を述べた後、日本全国の花街の実態についていくつか例を出し、元林院再生のために学べることがないかを調べた。

日本中で最も規模が大きい花街である京都は、芸舞妓を始めとして花街を後世に残すことを目的とする財団が存在している。このおおきに財団は、資金面での援助だけでなく、様々な企画も行い、花街を残す大きな助けとなっているのは確かだ。また、芸舞妓のための学校システムは非常に効率的な方法である。元林院では現在芸舞妓の数はとても少なく学校を作ることは不可能に近いが、プロジェクトが成功し芸舞妓の数が増えるにつれて、元の姿を取り戻す過程にはいずれ必要となる手段であることは間違いないだろう。新潟の古町にも共通することだが、置屋または芸舞妓をバックアップするシステムを個人が抱えるのではなくて、大きな枠組みで以て支えていくことが重要であり、効率的である。東京の神楽坂では、住民が中心となって花街を守っていこうと尽力しているが、元林院でも同じような住民の協力が得られるのかは不明である。だが住民が中心となって開始した活動が、株式会社を設立するほど規模が大きなものになったということで、花街存続のためにできることの幅も広がり、人々の興味関心をより引き付けやすいのではないだろうか。

そして行ったアンケート調査は、花街の抱える問題点を調べることが目的であり、元林院にのみ限定はできないがいくつか問題点が浮かび上がってきた。この調査で顕著に見えてきた問題点は以下の3つである。

- 1.負のイメージ
- 2.高額な料金設定とその不明瞭さ
- 3.低年齢層の花街への知名度の低さ

1については先行研究の時点で問題になるのではないかと予想していたことでもあったが、人々のイメージの問題であることからすぐに改善することは難しい。だが、この問題を少しでも解消することができる試みといえば、神楽坂のように内部を公開することが効果的なのではないか。そのために、低料金のお座敷体験を行う。あえて体験と呼び、敷居の高さを拭うように努力するのも効果的であろう。また旅行会社などの各種団体によるツアーなどのように、直接ではなく、他の団体を通して体験に参加するようすれば、花街を知らない人にも簡単で、気軽に感じられると思う。

2についてだが、この料金設定も花街の文化の一つであり、芸者さんには花代として支払うやり方も昔ながらの方法である。しかし、花街を現代にも残していくためには現在のニーズに合わせて、花街側も多少の妥協は免れられないのではないか。これは1でも述べたが、低料金のお座敷体験では、その料金をあらかじめしっかりとお客様に明示し、客の不安や緊張を取り除く努力をしなければならないと考える。同時に一見さんお断り制度もどの程度崩す妥協をし、広く一般のお客を受け入れることができるか、というのも最難関の課題であるように思える。

3は、筆者の仮説が、アンケートの結果として13歳から17歳までの花街への知名度が非常に低いことが分かったことで裏付けられ、後継者不足につながる可能性があると考え、問題点として挙げた。知名度を上げることはなかなか難しいと考えられるが、若い年齢層には若い年齢層にあった方法で知名度上昇を図るのが良いだろう、と考える。というのも、「舞妓はレディ」(2014年公開)のような映画や実際に花街に芸者を目指してやってくる少女を追ったドキュメンタリーは、花街のイメージを問う質問でこれらの媒体のイメージが強いと回答した人も多数いたことから、非常に宣伝効果が高い、と推測できる。

以上により、先に挙げた3つとそれぞれに挙げた解決策は奈良の花街元林院復興に役立つと結論づける。

今回の研究とは無関係だが、元林院写真ギャラリーの持ち主である建築家の山下喜明氏にお話を聞かせて頂くことができた。彼にお話を伺って、奈良市で行っている元林院花街の復興活動と2.1.2で述べた「つるや」の菊乃さんらが取り組んでいる「花街元林院復興プロジェクト」とは無関係であることが初めてわかった。彼も述べていたことではあるが、「花街復興」という目的は同じであるのに、行政と花街側の連携が上手くなされていないことにより思うように活動が進んでいかないという事実もあるのではないかと感じた。

謝辞

研究を進める上では学校の先生方をはじめ、アンケートにご協力くださった皆様に厚くお礼を申し上げます。また山下喜明氏には貴重なお話、ご意見を聞かせていただきました。どうもありがとうございました。

文献・資料一覧

- 池田末則(2008)『奈良の地名由来辞典』株式会社東京堂出版
- 勝部月子(2013)「奈良の近代:国際遊覧都市奈良を支えた花街・元林院」
- 公益在団法人京都伝統伎芸振興財団 平成28年度事業計画について
- (公財) 京都伝統伎芸振興財団(2016年7月26日取得)「ご挨拶」おおきに財団 Website
- 澤村明(2012)「花街の新しい試みー東京神楽坂『粋まち』と新潟『柳都振興』ー」
- 新潟文化物語管理者(2016年7月26日取得)「特集 vol. 19「新潟稽古と料亭文化」～芸妓を絶やすな」新潟文化物語
- 「奈良町元林院 花街復興プロジェクト」事務局(2016年7月20日取得)「PROJECT」奈良 元林院花街復興プロジェクトホームページ
- 西尾久美子(2007)『京都花街の経営学』東洋経済新報社
- 持田克己(2010)「京の常識事始」